入選

農業を守る「ため池」の整備を

下館中学校
二年　増田　蓮

私の家のすぐ近くに、勤行川という川が流れている。毎年、鮭が遡上してくるきれいな川だ。その勤行川の水が、今年の春は極端に少ない。川底の石がよく見え、コイだと思われる大きな魚が、背びれを水面から出して、泳ぎにくそうにしている。

田植えの時期になり、四月になると川の周辺に広がる田んぼには、耕すためのトラクターの音が鳴り、準備を始めている。

しかし、今年は川の水が少ないため、田植えしたくても行えず、母の職場では、

「雨がしっかり降ってくれないかなあ。」

と、困ったように話をしている人がいるそうだ。川の水が少ないと、たとえ田植えをしても水がチョロチョロとしか流れてくれず、思うように水を引き込めないという。

平成二十八年から三十年にかけても、夏に水不足になり、楽しみにしていたプールも早々と終了してしまった。今年も四月の降水量は平均の四割未満。これからも空梅雨気味で、一番取水が必要な時期に、これでは水不足が心配になってくる。

昔から、降水量が少なく、流域の大きな川にめぐまれない地域には、「ため池」が作られた。農業用水を確保するため、水をたくわえ取水できるよう人工的に造成されたもので、一年間を通して雨が少ない瀬戸内地域で多くみられ、ここに全国の六割の「ため池」がちらばっている。昔の人々が、生活の知恵をしぼって考え出したものにちがいない。

しかし、現在では、水問題は瀬戸内地域だけにとどまらない問題だ。ここ何年も異常気象が多く、ゲリラ豪雨が多く発生するかと思うと、全く雨が降らない時期もあったりで、自然の気候に頼ることの多い業種、特に農業を行っている人々にとっては、水問題は大きな課題だ。たとえ、取水ができる川が近

くにあっても、台風などで川が氾濫すれば、田んぼは一瞬にして水をかぶり、大きな被害が出てしまう。

そんな時に力を発揮するのが「ため池」ではないだろうか。

「ため池」は、水田に安定して用水を供給するための水をためておくだけでなく、大雨の時に、急に川の水が増えても、余裕があれば一旦ためておくことができる洪水調節機能もある。

約四年前、鬼怒川が氾濫した時、勤行川の一部も決壊し、隣接する田んぼに雨が流れこみ、収穫時期だった稲が水浸しになった光景を、近くの土手の上から見たことがある。一度雨水に浸ってしまった米は、価値が下がるという。これは大きな被害だ。あの時、近くに「ため池」があったなら、水を逃がし、川の決壊は防げたかもしれない。「ため池」は、取水可能な所でも、緊急事態や災害が予想される時に役立つものである。

その他、「ため池」は集落の防災用水として使用することもできるし、さまざまな生き物が住むよい自然環境となり、子供達の学習の場や、多くの人のいこいの場ともなることができる。

この「ため池」も、農業を行う人々の減少で荒れた状態のものもあり、「ため池」の決壊による災害も起きている。

しかし、雨が降るのか、川の氾濫はないのか、水不足の心配はどうかなど、農業を行う人々の不安解消の一つになる「ため池」。荒れたところは整備をし、さまざまな事態、災害を予想して、田んぼが広がる各地に一定の間隔で「ため池」を設けてほしい。ぜひ「ため池」の役割に注目してもらいたい。

それと同時に、川の堤防の整備や点検を行ったり、「ため池」ハザードマップの作成をしたり、複数の対策をすることで防災強化をし、農業を守っていってほしい。